



西田幾多郎 〈絶対無〉とは何か

ながい ひとし
永井均 著

NHK 出版 [定価: 本体 1000円 + 税]

推薦 木村 敏 (きむら・びん)

河合文化教育研究所所長・主任研究員。京都大学名誉教授。専攻は、精神医学・精神病理学。

著書：『時間と自己』（中公新書）、『自分ということ』（ちくま学芸文庫）、『木村敏著作集全8巻』（弘文堂）など多数。

これまでの『わたしが選んだこの一冊』で、私は西田幾多郎（『善の研究』）、和辻哲郎（『風土』）、デカルト（『省察』）といった古典の名著を取り上げてきた。今回は大転換で、私より20歳も若い気鋭の哲学者永井均氏の著書について書く。主題は西田幾多郎だから、この点では連続性がある。永井氏は河合文化教育研究所が毎年開いている「河合臨床哲学シンポジウム」にも出演していただいたことがあるから、私も面識がある。そのときの発表は「自己という概念に含まれている矛盾」についてで、これは『「自己」と「他者」』（木村敏・野家啓一編、河合文化教育研究所2013）に掲載されている。

永井氏の一貫したテーマは「私」とはなにかという問題である。われわれは誰でも自分のことを「私」だと思っているし、自分を指す一人称の代名詞として、ふつうに「私」を用いている。「ふつうに」といっても、われわれ日本人の日常会話では一人称や二人称の代名詞は「省略」されることが圧倒的に多いし、使われても相手次第で「ぼく」「おれ」「自分」等々、さまざまな語で代置される。しかしたいていのひとは「私」がなにを意味しているかを漠然と理解していて、必要さえあれば口に出して言う「用意」はできている。しかしそれはなにを言う用意なのだろう。なにかを言うたびに「アイ」や「ミー」を口に出す西洋人と違って、日本語に見られるこの代名詞感覚の不分明さは、永井氏の「私」論の、少なくともひとつの大きな要因になっている

だろう。

永井氏はこの西田幾多郎論で、まず『善の研究』における「純粹経験」を検討し、それからこれを、われわれも昨年紹介したデカルトの「われ思う、ゆえに、われあり」の命題とつきあわせる。この命題には二つの二義性がある。第一に、これは西田にとっては「直接経験される事実」であるからそもそも疑ってかかる必要がない。これは端的に「思う、ゆえに、思いあり」以外のなにものでもない。第二に、この命題はデカルトによれば「私がこれを言い表すたびごとに〔……〕必然的に真である」。となるとこれは論理的な真理である。西田はこれを拒否して、直接に経験される「生の事実」を求めた。

その後の西洋哲学史は、この「生の事実」ではない側を自立させる方向へと展開した。その頂点に位置するのがワイトゲンシュタインで、彼は「直接経験の事実」(E)を「言語ゲーム」に乗せた。デカルトを「過失犯」とすればワイトゲンシュタインは、「確信犯」である。そして西田幾多郎は、それとは逆の意味でのもう一人の確信犯で、純粹経験が言葉と独立にそれだけで意味をもちうると考える。

この永井氏の西田論は、私のようにけっこう西田を読み込んでいるはずの人間にとっても三読四読に値する名著だと思われた。永井氏自身は「幸か不幸か、本書は、西田幾多郎の哲学の、わかりやすい解説書でもある」と書いているのだが。